

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 mm

門ル4
號5102
卷2

昭和41年12月20日
原安三郎氏贈

江戸歳事記卷之壹春之部下

二月

朔日○日光久能山御境篤御頂戴 上野國山天台宗院清空城
中丁日○湯守聖堂軒真シマシテニ 庵人ハ経すよりかく先聖先生師九哲シキ又宋氏之弟子
朱文公あり本の軒真オキマツリの画像と掛らる程明道 程伊川 邵康節 漢橫渠 周易叔
軒真の流れ傳り一庵仁の机ひ接中絶を續るに寛永十年登圓林及春先生 治食ば數り
と世に一庵と經營して先聖真十哲の像と至る也と先聖殿とひ元徳曰幸幸未二月而
移され奉く軒真の式とえひける軒真の制度ルくは未満先生の制度をもどさむへ

儀塾集七甲子仲春詣江都上野先聖殿觀釋奠

今曉初觀先聖殿杏檀春雪更清鮮笙簧鼓樂融和至黍稷粢盛芳

潔連三聖明明如在上六賢翼翼似臨前懃懃拜于兩楹下且喜儒

風吾國傳

本邦事記合

このが一あにうけとうつてからひりはゆとタメタタリ 二位中將

山の名小出家由中軒真聖傳と洋せりやく
初年○江戸中移向京前日より縦ア 江府ハすぐ移向劫清の社殿へ武家

社劫清せざる事無くも社の境内より安守る所神事と奉一常帛とさけ布中少々桃竹

東京市立文書館

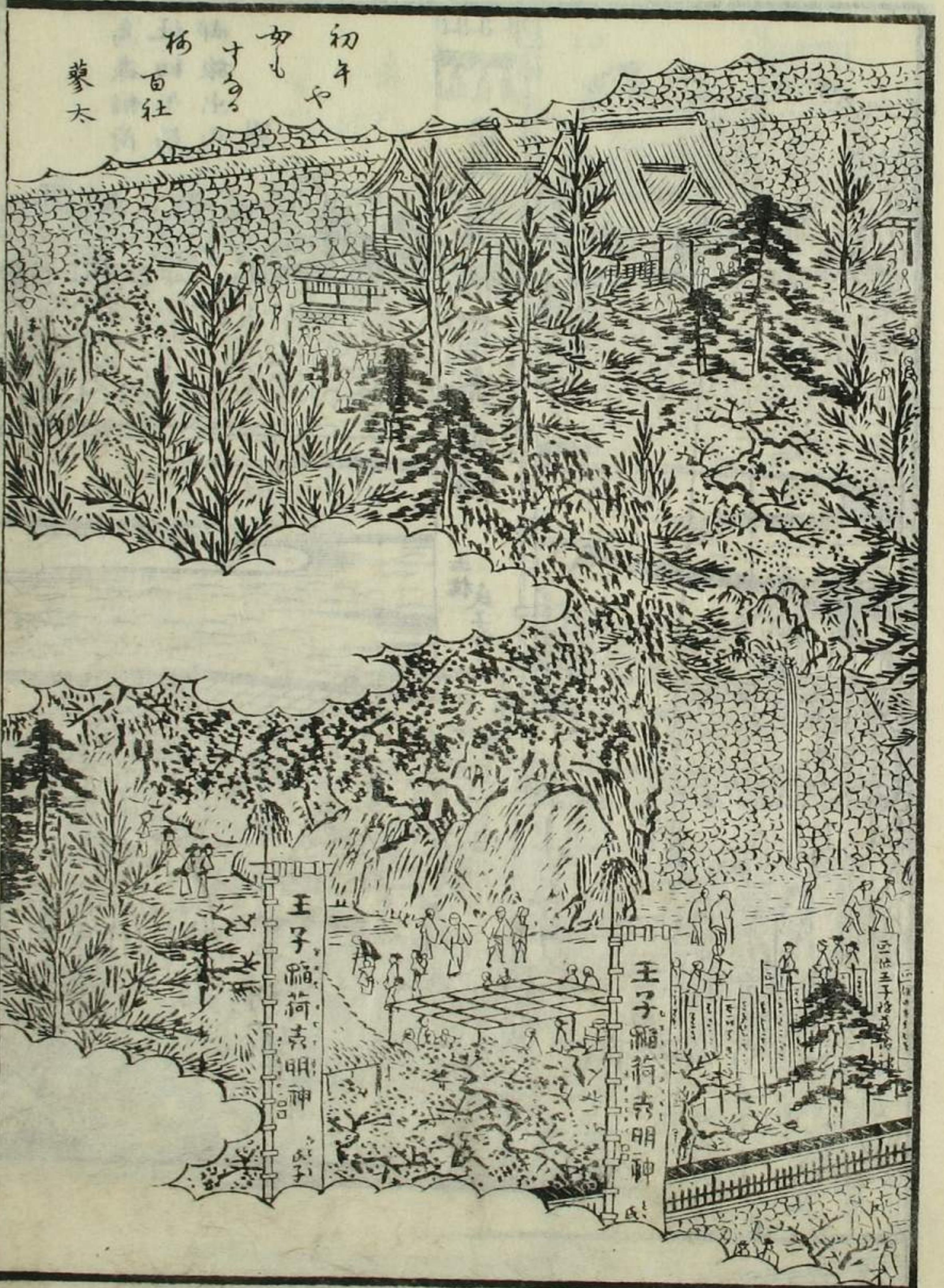
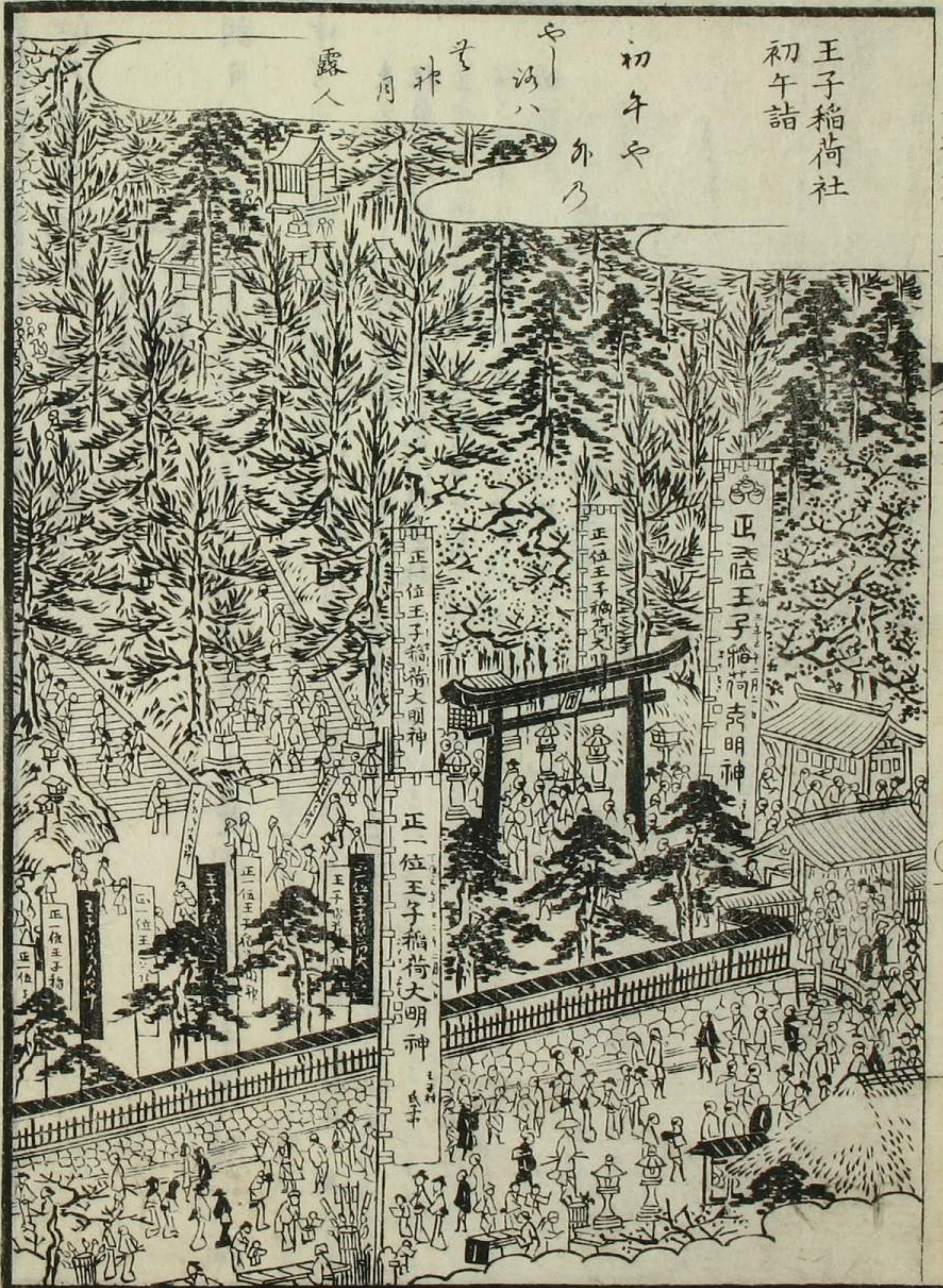
卷一下

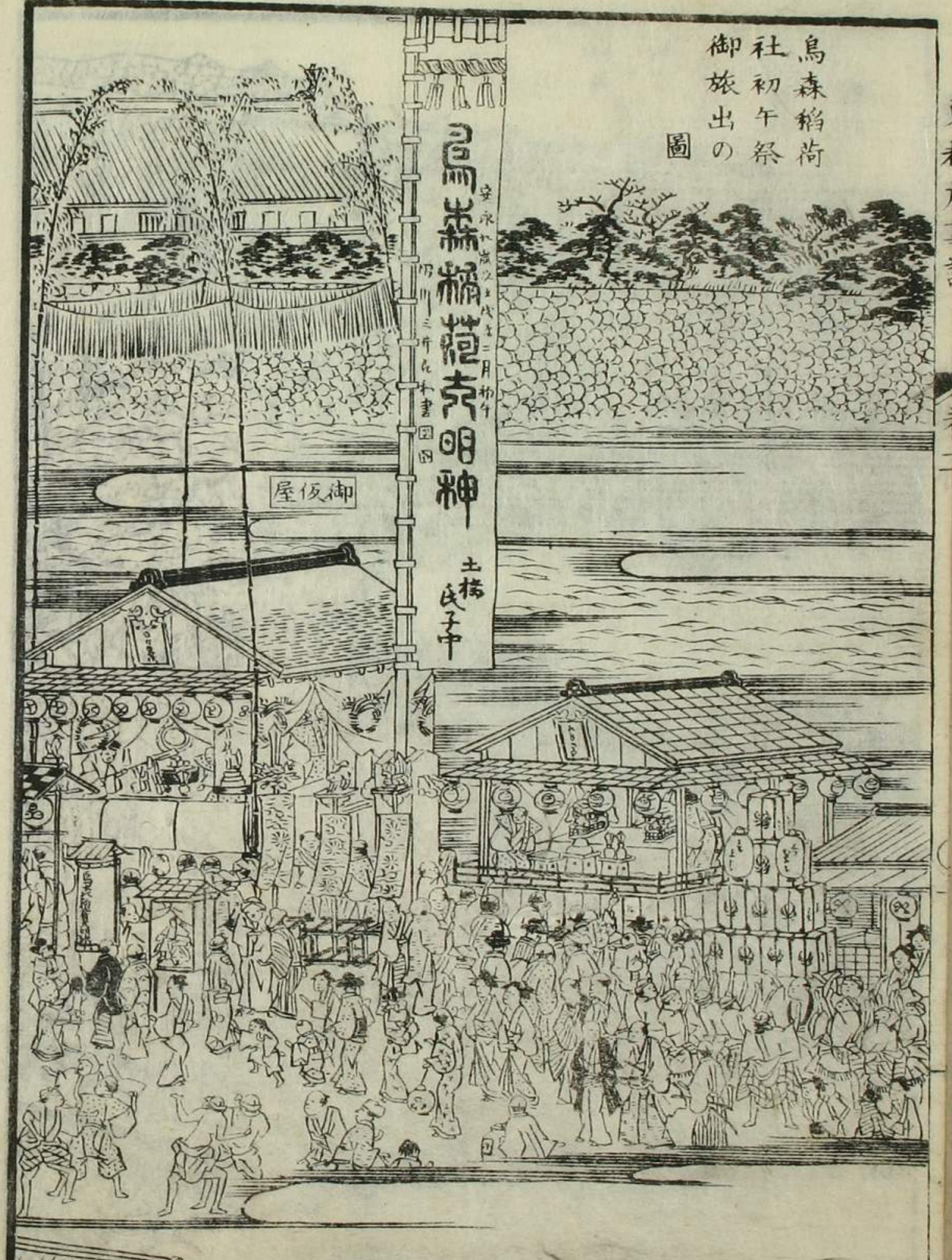
王子稻荷社
初午詣

初午也

月八日

露人





乃はそぞり一入彩の幟木達つ。神あふハ伊勢燒ととさけ修業社室を清て法事屋又
男兒祠あ小集りて終新鼓吹モ。多は多里と号して鷺翁本社へ詣めりは小き紙よ已う
名ふと記し。されどもりてあるとくは族強よ多リ仰坐も神人以下の然あり。朴田紺原町
の辺、多よ小宮香居と造りて高止廟。依之町とよは月分て買入キ。東近鷺翁の社をあ
あるは如く。多きはあにハ主雄多と譽る已まよ万う一あり。初午の日方餘る太鼓商
人街トキ

王子鶴翁が盡全輪も関八呂鶴翁の同母妻
妻戀鶴翁の湯等よ在はるよ於て狐惑
と避る神舟と生れ

二日より彦子の町、神楽と酒、御旅所へ迂回りて初年の翌日近づき御出
ありや、ゆりや桃竹櫻木出る日落町の通り行燈と年玉まと
鳥森鶴翁前田長政、元治元年正月

山田氏江年の二月
より幸村清門外へ依頼と補理にて清旅山向り同日產子町に神喪と渡り初年の翌日夕方又改喪
あり町々大懺を立獅子吼花山一ホヒ拂り拵灯木多く出ほ又隔年又彌天煉ねとせり旅あよて松

のまちの村井とすみ産子、二葉町、志房町、横田、徳永町、同和泉町、同飯塚町、あかり町、布のあは、市津鶴翁、糸乃壯観、ナリ
の旅先もて
久の床島の
駅找タウカ下川
名う小網町
の、る、
異巻エヒスマヘ

志摩の海
シタヤ
下谷
クマカヤ

國の事も断本法も
手卷陀羅尼

鶴翁の
外
大都鶴翁の
所處
油擣鶴翁
田町
九郎助鶴翁
船廻中鶴翁
社名地所とより
學り鶴翁の
上部より穴
サニサキ
一鶴翁の
谷
カサモリ

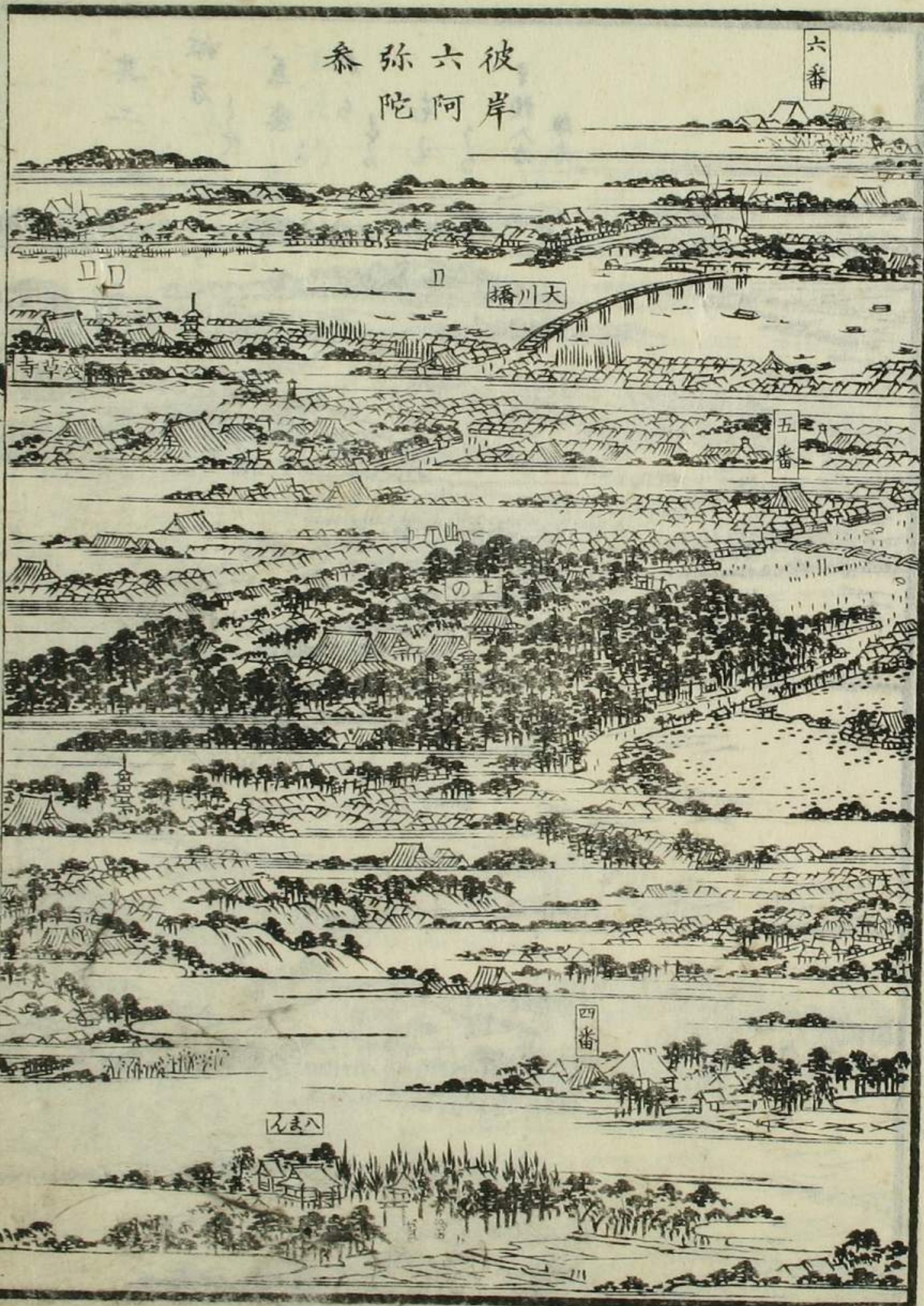
中
の事のありとゆ
治行
廢帝
廢帝
傳通
冰箱

る田舎衆も今日古例の奉^{ヒサ}神の
式又二十人度のうち無^{ナシ}けあり
茶の木鶴翁^{カミコロウ}
市谷八幡^{ヒガヤハチバン} 花園鶴翁^{ハナゾノカミコロウ}
坂上林^{ザカノミズク} 嵐山光院^{アラシヤマコウイエン}

日
世継鶴翁の 中坡 露山鶴翁 梯田経障鶴翁 坡之因鶴翁 又ちよりと云
木坂町より ツバキヨ
産小火輪翁の 塔上 カサモリ
奈良子翁の 因幡在主外 ヤツヤマ
金の鳥翁の 金の鳥翁の 深河

萬西金町の洋炮列和泉橋をあはね湯が絶え移行紅色と黒と称し流惑
ミサキを避されと申す。ある中のハ城就も移行の往々て感得の富はせしむ

二月初午迄切より二の年の自筆とあつて寛永の比翼吉ふよりて始り
四年やをうよひすじゆう筋立園へきる年や江戸ハ一本も棗の粒百明一初年のうがれ



○今日より世清水主へ百文寄りとある者あり、されば縫船を以る由云々のせり

○け日小児を習達書の師道へ入つせしも者あり、「よまよとくちもひそめでる務若山 七角
二年二年○古例より又ハ初年の日をもす。ゆまた、今日より年を以て年をもす。
野ふハ大きく初年小號引ひあり

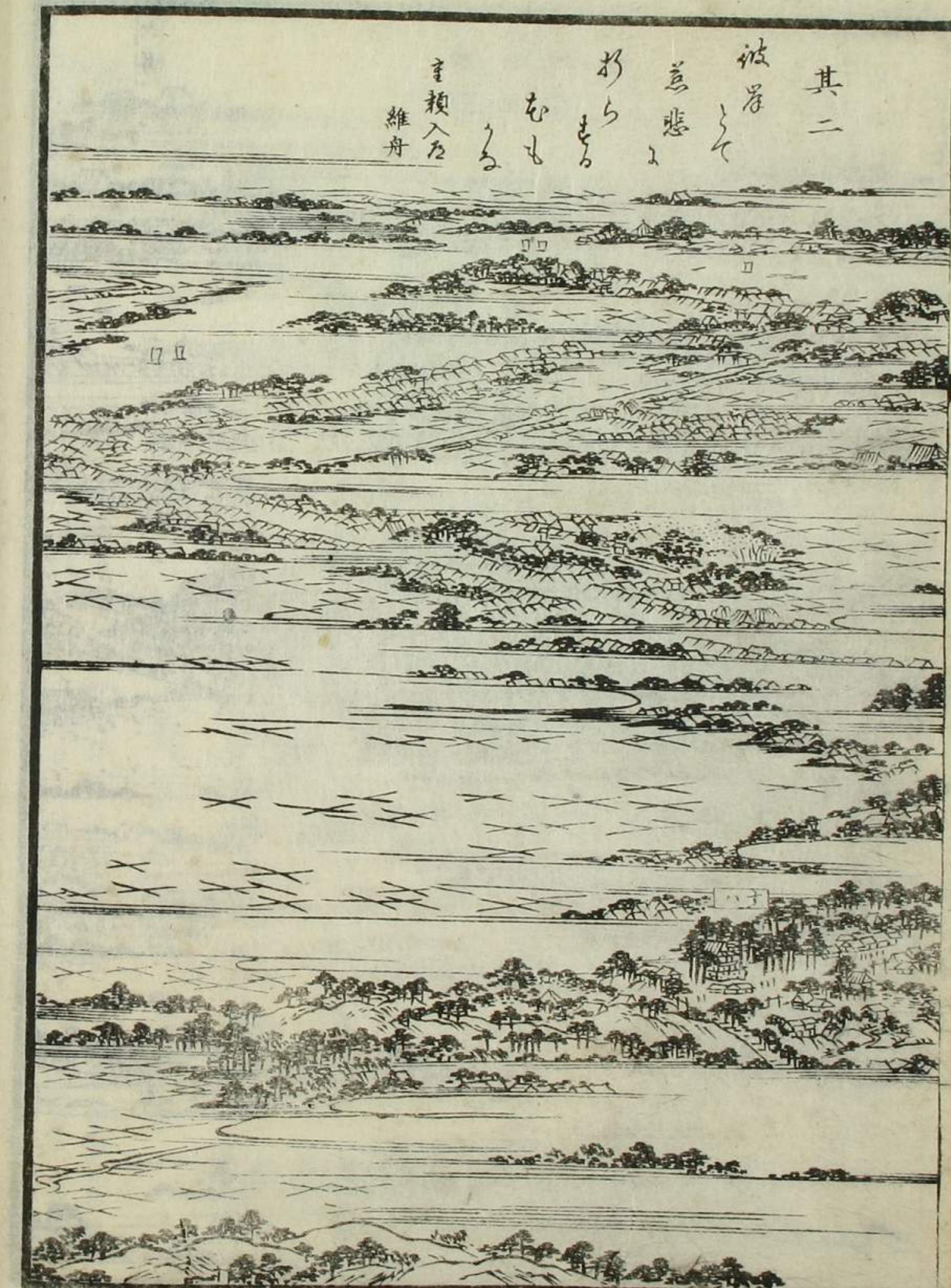
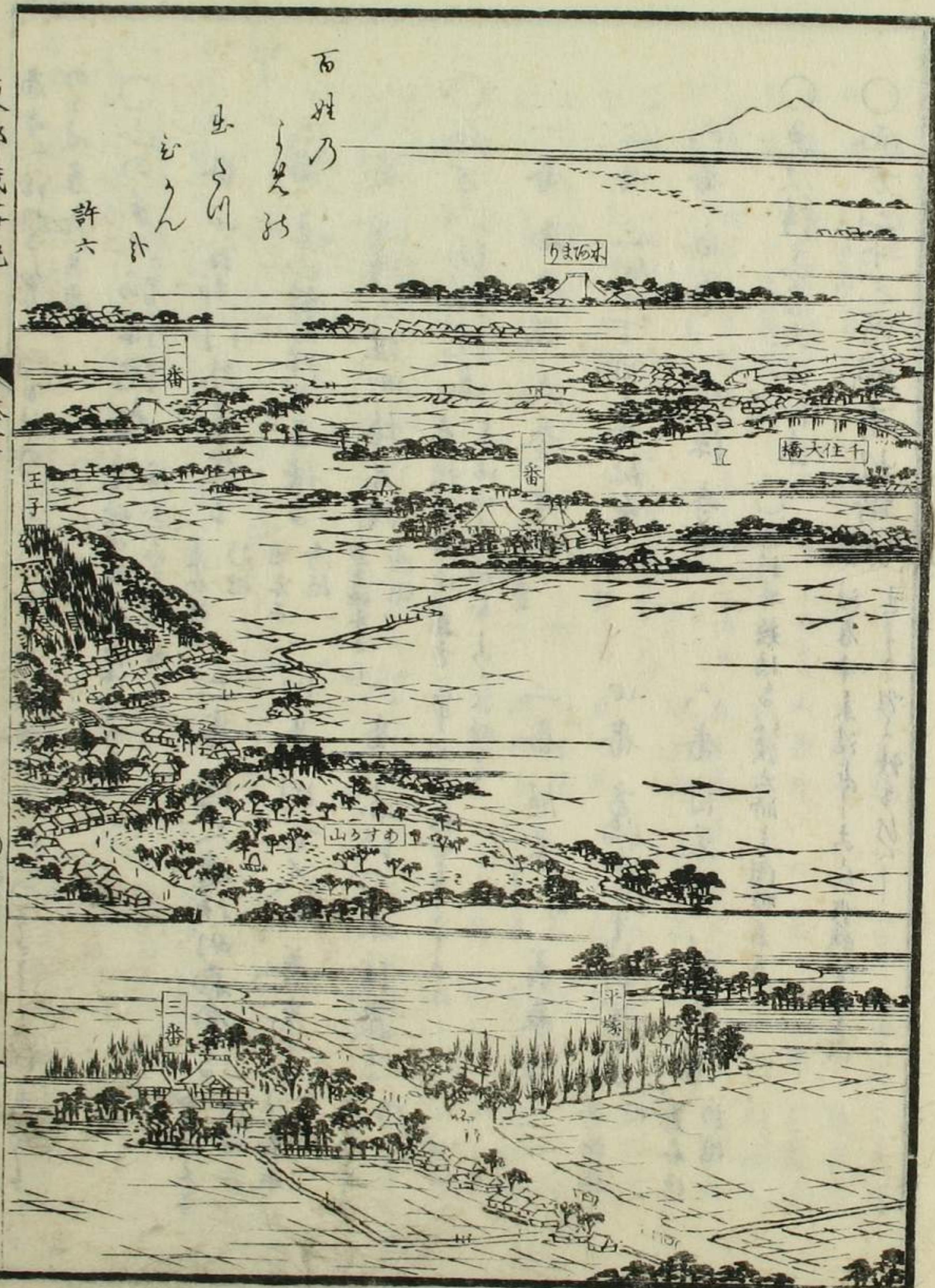
○二年四聖坂功運も鷺為神事無引ひ長境内大木のすれ様たり。寧あり

○二の年の内十谷茅町境鷺為多れ也。宝慶十二己未までハ萬年小祥裏と波。茅町二丁目
示同四教ある町ト云々。の町池ノ鷺也。茅町根津門。木町同。永町湯。鷺安寺。まつ葉同。根津門
門。あ以上九町より十一番の中。御り地と申。タタラ。同。十三年。神裏をもす。安永二
年。多より。神裏もす。さとす。

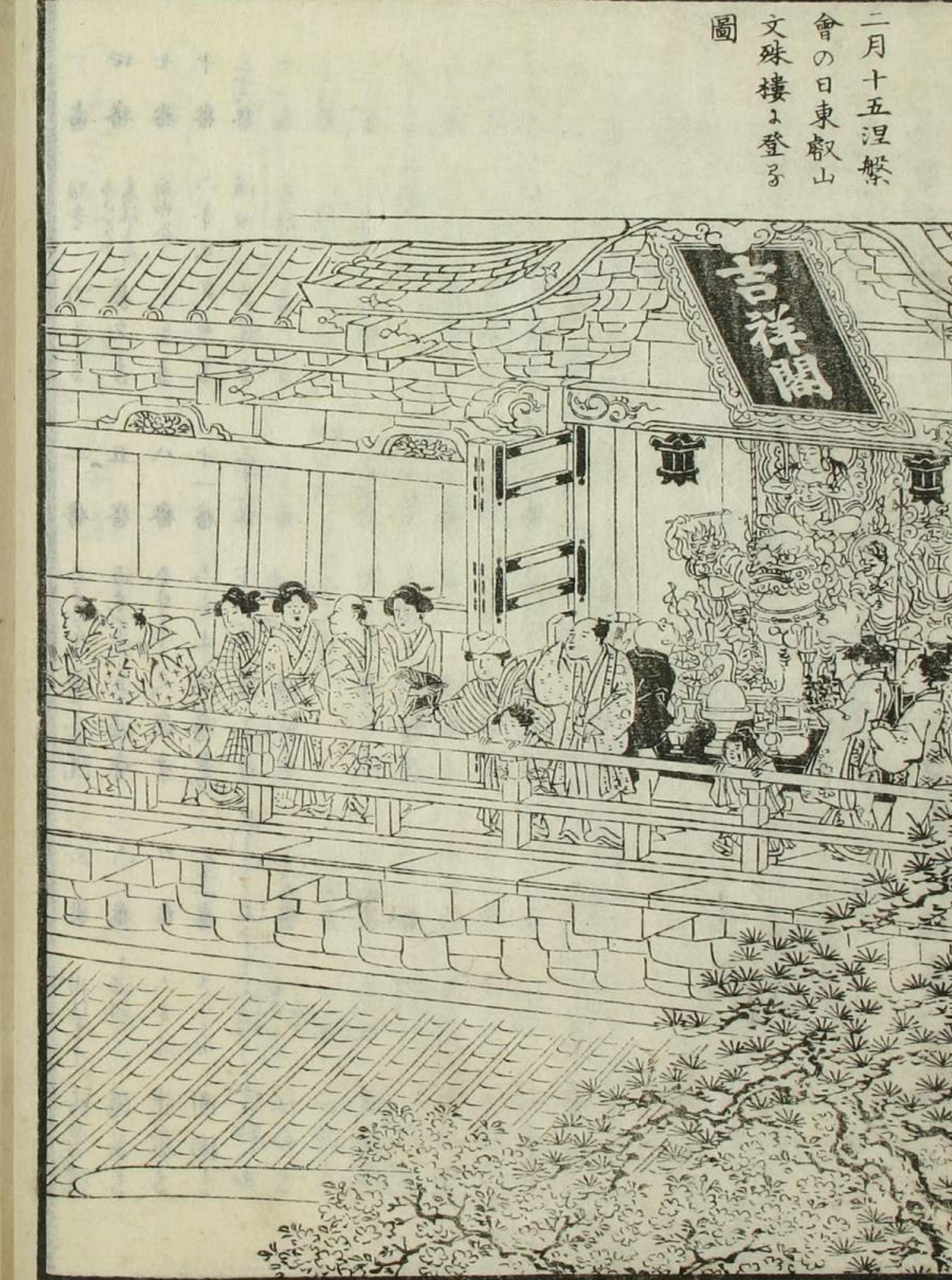
○春の初日より
ある日は初日とて
吉野宮を訪友一休もゆきりにひよ付表し修む
○又、このふ陀糸六紺ともいひ基井の他より
波多津郡鄙の坊人を説くはつ

一一番 下谷度山院 天音樂院 田畠
二番 烏鵲原 ま お葉院 田畠
三番 鳥居原 ま 安量寺 早瀬
四番 卜添院 ま 一一番 上豐源村 保
五番 延命院 ま 六番 乘廣院 保 常光寺 あくま
六番 乘廣院 保

文藏村性翁も本陀如來の像ハ以基寺之本陀の末本とて送りゆふあめり世信より
の本陀より源田延命院より之子佐町へゆる去る所トヘありふの本陀巡れの壁ハ
あめり



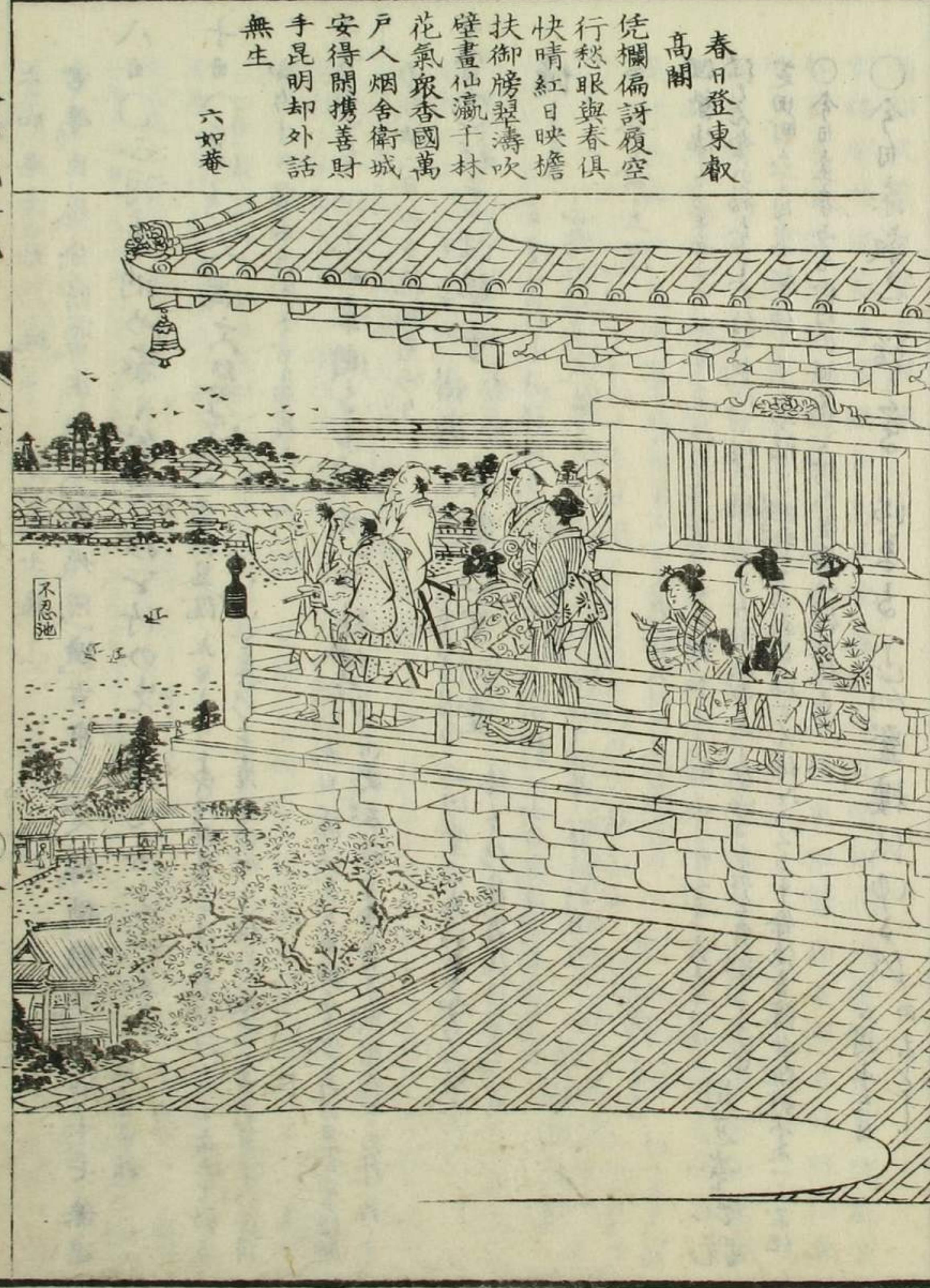
二月十五涅槃
會の日東叡山
文殊樓上登子
圖



春日登東叡
高閣

凭欄偏許履空
行愁眼與春俱
快晴紅日映檐
扶御榜翠濤吹
壁畫仙瀛千林
花氣眾香國萬
戶人烟舍衛城
安得閑携善財
手昆明却外話
無生

六如菴



六如庵詩鈔二編 六 謁義士墓

君辱臣死分所當生同呑炭死同墮古來一人得猶難况乃四十七豫讓
八日○正月奉納め家へ荒田移と竹の先ふ付て屋上小室を
或もより始

別處良見院九日より本居群集を休むとはあはれていた
ゆり又休ふと無灯籠を菫子の町に松灯懸あらわし正月
より一月室水六日より西國へ

九日説法十二日延生きの日を度
也更衣放生會音楽鬼舞表の外執事の
シリウギヤウダウ二り堂のちりまわるふもん

十六日○秋高涇巒舍 勸引 東嶽山常寂堂
徳も特坐を伝の事なり
本堂也修め修め
己の刻一山の危徒宝あり
沙茶寺 おひて法華二昧修めあり
本堂

坂本少翁より今日掛るところの件地理緊密と
ト谷養玉院 大塙渡邊も 大師堂まで
大谷川等々の事わざて近眼大師の御遺り
御心向付也 里采春と書かれて有る事ある

同思安畫院
徳ちゃん會の時を半の後へ是代と絶て掛かりて夙のうひのうを毎ハ掛けり也
芝田町六丁同裏繕後ち小あ後も^{テウニス}那典きの画る徳ちゃん像とくらを餘徳も院者執り承一不紀
今向左角から右の英也とちく垂れて云ふがモ

○今向東収山 墓上も 沈弟も ひつ登樓、はゆる
正月十六日
のむとく

卷之三

南郭文集
登吉祥閣
吉祥層閣倚蒼穹宮殿爭高此地雄似叩天闔朝北極應觀世界住虛空
彩雲近傍諸陵出玉樹斜連御道通一自飛來稱鷺嶺長懸日月照山東

同
佛滅日上三緣山三門
黃金闕上苑白馬倉東京待闢三門鎖登驚百仞成太虛通帝坐眇麗壓
乾坤王氣深凌勢官雲散梵聲練明迎海霽奇錯繞都平煙暖邑花早日

草
三
月
廿
日
正
法
會
經
文
一
佛
滅
萬
古
會
羣
生
自
力
恒
沙
盡
俯
觀
品
類
情

十六月の東山のり○高田穴八幡宮神乐○山谷天井も雷電移着祭
○堺町中むち劫三番屋あきけ日芝居始く舞の日なりとて一度のりあらとあれ祝モ鬼承

元年甲子二月十六日神橋少翁於粵江之濱吉例より今大保少翁て二百餘年小乃へり
十六日○本而一ノ同毎天堂琵琶會ビハエ 今約十二度の神樂カミガタより已刻より瞽者ムカシ奉社乃内陣
小集會一琵琶と簫一平家と連り未刻又終る

商社も元禄の比松山檢校信一の勤謹よりあけ檢校相別にのちの毎々天から取引を御め
とゆきり元禄の時よりもほかどお頗り懋檢校と給へ是び戸懋檢校の時ありよつと商通
不のときもとく日本東洋へ東方よりいき衆多も商人集會ニココ也其の画象甚しき
作乃

宗の神無とれど今日京に來せばのよし原用
画像とうけて琵琶令修があり侍へり 人王之子代 仁ぬ天皇第の皇子と人康親王とトモ
又天祐アマヨの皇子ともナリまも 萨摩光孝天皇の子トモハ満り才を同く 丹眼高しきせぬし貞親十に年壬辰
二月十七日之年は十二才少く薨逝ありけ由子盲人と憐せぬひそ勾当檢校とリシ坐政の事と據て
ゆりこゝより今日も吉洋忌の遠承あるよより報恩の為もおこなふる事あり 又翌十七日
マキの原をみて凄苦ミテクタフエ余しとすとつて江戸も一あれよかひて今日ひも多聞

○南同日本より江府の酒肆白酒と送りて集ま中やも漫食町を居るの酒肆から今日
終一の小高の走をより求るがち後へあるよう日本市でゆき

廿二日○葛西下護國妙福寺慶誕太子東

廿二日○　新戸妙義系　今日も法性坊も立候ふの意旨あり。あはちは信正の男仕く
今日うち天満文多れの日よりと申候ま。

サムシング　巻戸天満宮法事

松明 仕丁十人 大弓鉾 仕丁二人 青白幣 布衣二入 箕火 仕丁二入 乙女二入 巫カミ 久人 鳳羽鳥帽子 稲衣 十口 大祿正
立鳥帽子 丸衣 鎧 妻打 仕丁一人 乐左鼓 仕丁二入 乐人 香兜二入 横笛 乐人 香兜二入 司勢職 法裳七疋
布衣 二人 童子 一人 丸手手ぬき 仕丁三人

今日庵中見物とあらず ○ 駒町平河天波文若作主事の清経と相せしひをか
○ 芳湯町山王御旅牛肉天波文 井川
諸井氏 白金花城天波文高田主院天波文牛込横町天波文
考索 ○ 廿七日乞弱達海翁吉庵宿社大般若

今より二回
離人形の花立
おもむく近寄りと笑ひ送りて商ひ

是と求る人多大盛況あり中年七十有九歳と無花の生一と
人形師系舟月といふ者一般の製と云まゝ名づけ古今を
てありけ製作よからず

芝林院家　元緑の妻麻子は中橋の離市と徳せり今ハ中橋
八日○下川南番場本光も聞く忌日付上人の恩やり

フランダ
ラモー人ふ事小一役幕府
ひくんを人等者一人數合二人より當因の事も甚

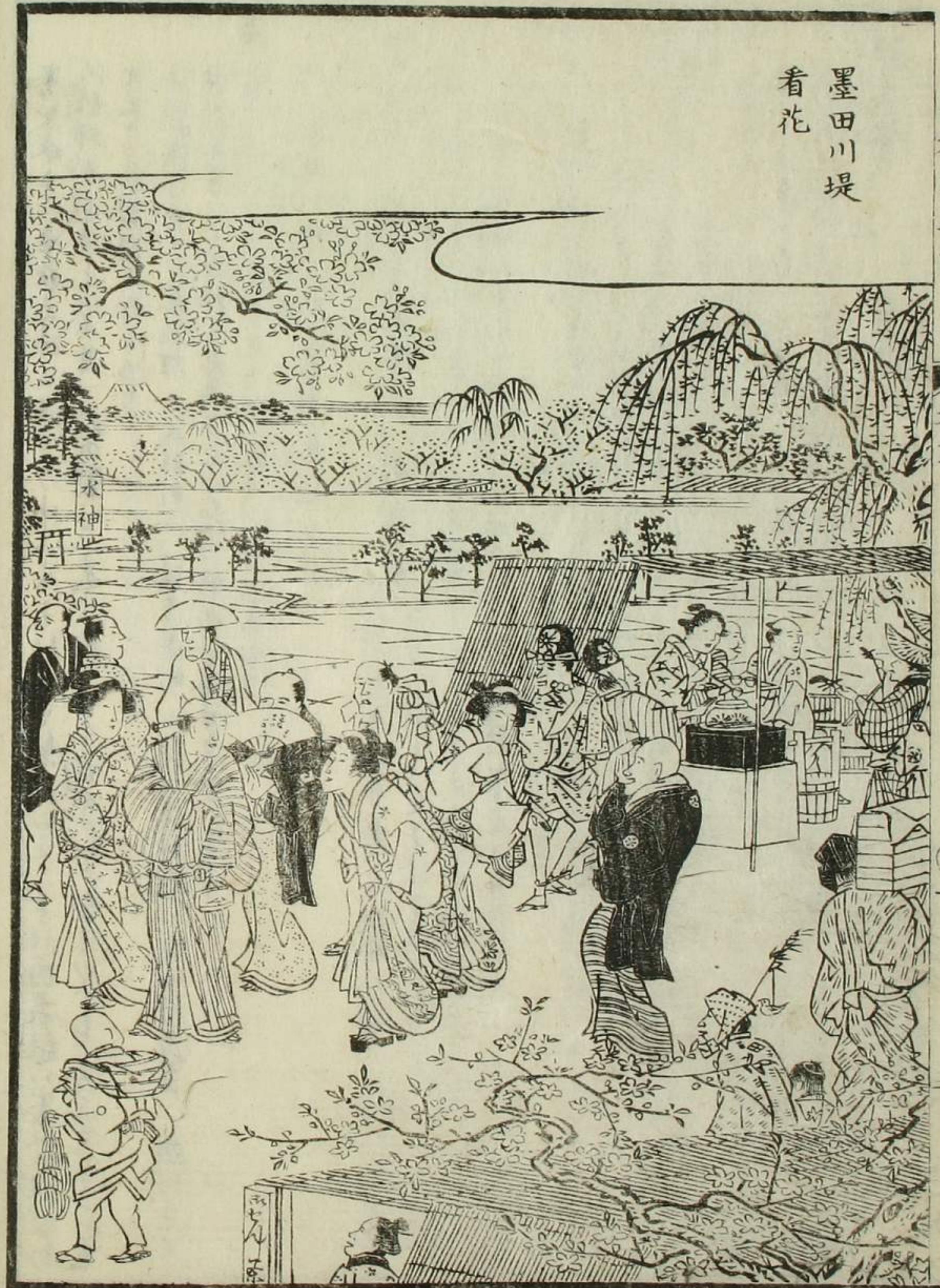
（略）

一 本石町三丁目居酒屋源九郎方より泊一月上旬
登 滅きに來ハ毎年ありしきを來み年よ一夏とも又うびん年者のおよ外科主人あり
しむきも文政以來改りて二人とすれり業人來るの頃ハまよ十九甲亥年ありと云ア名務有

○白魚　瀬川の名物あり初夏浦より二月より川へ入二三月ほど砂の宮より流
その子秋より浦より流り浦に入て生長しとく尚十二月の季下りあり
立春より半又山東坂二ツ寺の本堂例　伊勢守町入に　慈林院

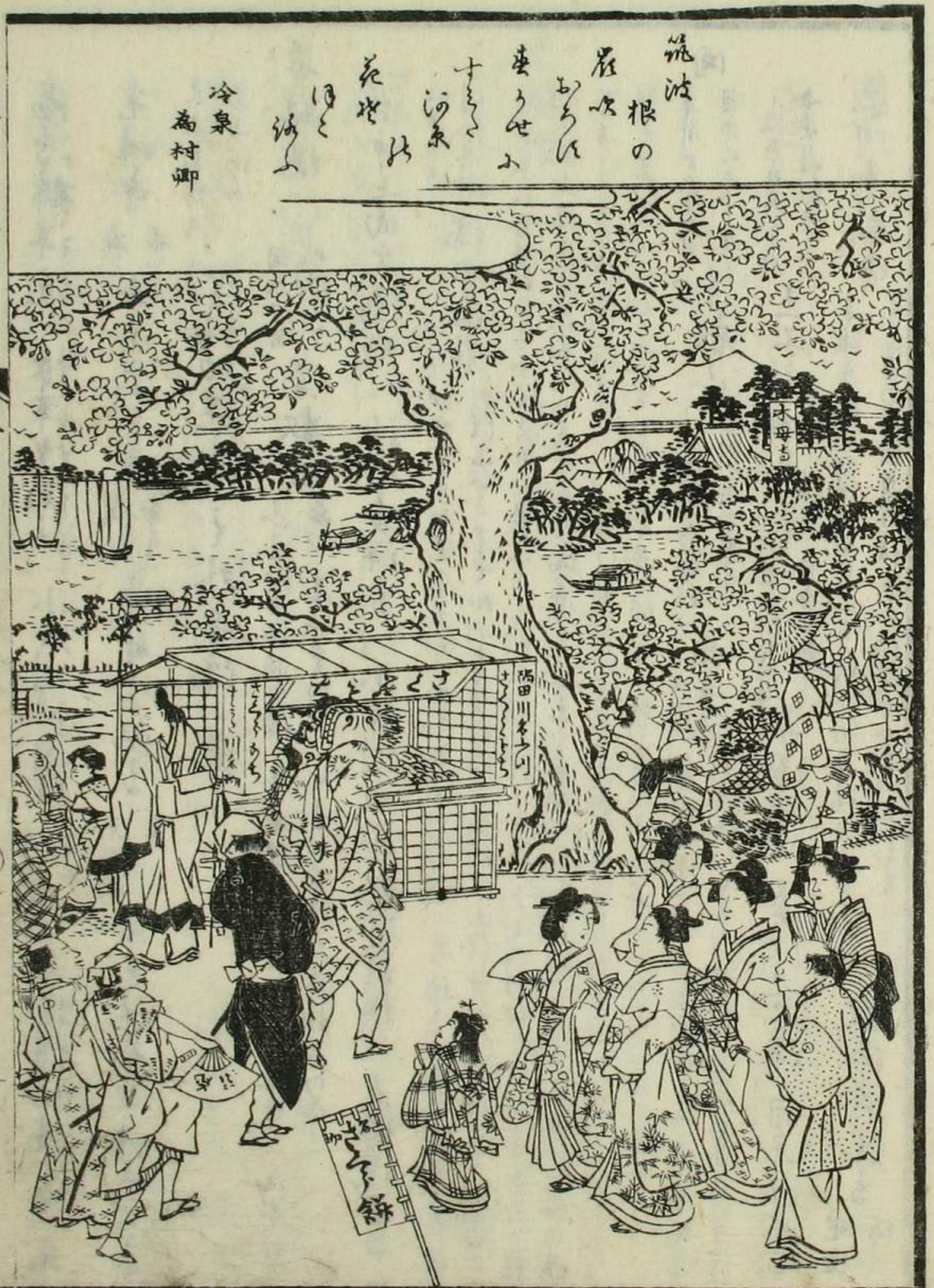
山中日記より 東齋との茶会
あひのきくら、その昔 古今ふたりてま世の苟と極きせらまし處とを鑑のあらまよ爲雅
候に羣り花下に遊宴して夕照の斜かくと情むよとんまひゆか、既トと離てゐをくわい
春秋の頃やも外かくね風情多々、攀峰又集よ搖う峯の辺山王の様、躍山先生裁ひまし由紀り
枝垂桜シダレザクラ 桐トチ 東齋山ヒクラン 坊仲よ
谷中ヒクラン 四幕里シマツリ 痴痴シシキ 経ハタハタ 木大翁木太翁 也久院也久院 先生
左洋院左洋院 之外ち院庭中中 ふ多々

墨田川堤
看花



鏡波
根の
岸吹
坐うせふ
花吹
河原
以上

冷泉
為村卿



湯冷鱗洋院 根津權現社 小石川傳通院 本堂の左 大塚護持院 廣尾

光林寺 麻布成子家也 太木 中世宝仙也 光明院 同恩祐天也 深草の右

太木本坊乃 あふゆり 聖坂功運也 三外寺院ふ事

草辨橋 ヒトト、 ○ 四六日 東収山 山王 本洋閣の傍 豊巣院の邊 田肝も町林中 青井坊

谷中七面宮境内 沢延吉洋也 小石川白山社地盤橋 大塚護持院

コガ子井 小金井橋の奥峯 江戸より七里余あり高木の様ハ完永の首橋をせぬ歓居幸保 と今後もまちかくとりに若木とありぬ折一橋より水上小川引田としむる河程一里餘處峯悉く花木列りて春時爛漫うるむ草辨橋にて疎々潔白なりを第一松油の雅名多く金井橋の例橋也とひきを名ノ翌日ふきもの古刹と尋ひ又造玉其社の宗家乃社門は清川より風毛と賞一年魚を汲へば地の名産也てを美味なりは邊近て古跡多く立木を立木の半身 立木の半身 東収山 山王清翁写影 アスカヤ 高木の橋ハ元文のころ桂子守らしく不そ同日このより同京舟船の玉子金輪ちの花 日暮よ娘 平塚社邊 豊沢九品佛 同恩祐天也

毎夜遊観寺 テニヤ 玉子金輪ちの花 日暮よ娘 平塚社邊 豊沢九品佛 同恩祐天也

足川御殿也 モハムの風致具り佳景の地 九郎葉の花也

駿河御殿也 モハムの風致具り佳景の地 九郎葉の花也

同不光福也 ヒカルトトキホリノアメ 本宿接町より入る 高輪如來也 セムタガト 清田川堤 本母

す辺 ヒヨリの傍無ハ浦玉ますをくちも志をなとくわざいを極のほきねに連りて此 まももみゆゆく一ヶ所ばかり其岸は皆は寫ハ寫の変化ありて東延一ヶ所のうちに

浮生付け長堤揚花ひまぐくてよき用ひを一匹の絲と引くと河やまぐる都下の良縁目毎

小あた群游一樹トに宴と設け被拂して政と應ひハ享す春年の餘派かくても見るは都

游賞の第一とぞ りへうりける 大窪七面宮境内 シホーへうりの名と云ひて彼岸より八重にゆ 追跡り山号春時山とももと賞すがを

重辨櫻 ヒトトナツ ○ 立木の七十日 東収山 清翁秋毛櫻 谷中日暮里 ヒグラシナサト 该訪社辺田園の眺望をと

立木は諸く浮生のにはゆく於く人日每す多く涯よきんて大器と投て戯とて或人云拾の

日當争くして其をくびとす とひた満ひの邊を雀多 玉子權現社辺游の川 根津權現社内 谷中

天王も 同瑞林寺 ふ川御殿山 駿洲御光也 光福也 津蓮寺

同東福也 サハ木の様あり齒も森板安永に車の機械起小 大塚護持院を達悉く名目ど記り皆名のとて今人持るゆりと年

金玉様 シワ 一名憂 乎跡り谷仙萬院 物目暮 桐木村圓照也本惠揚砂村元

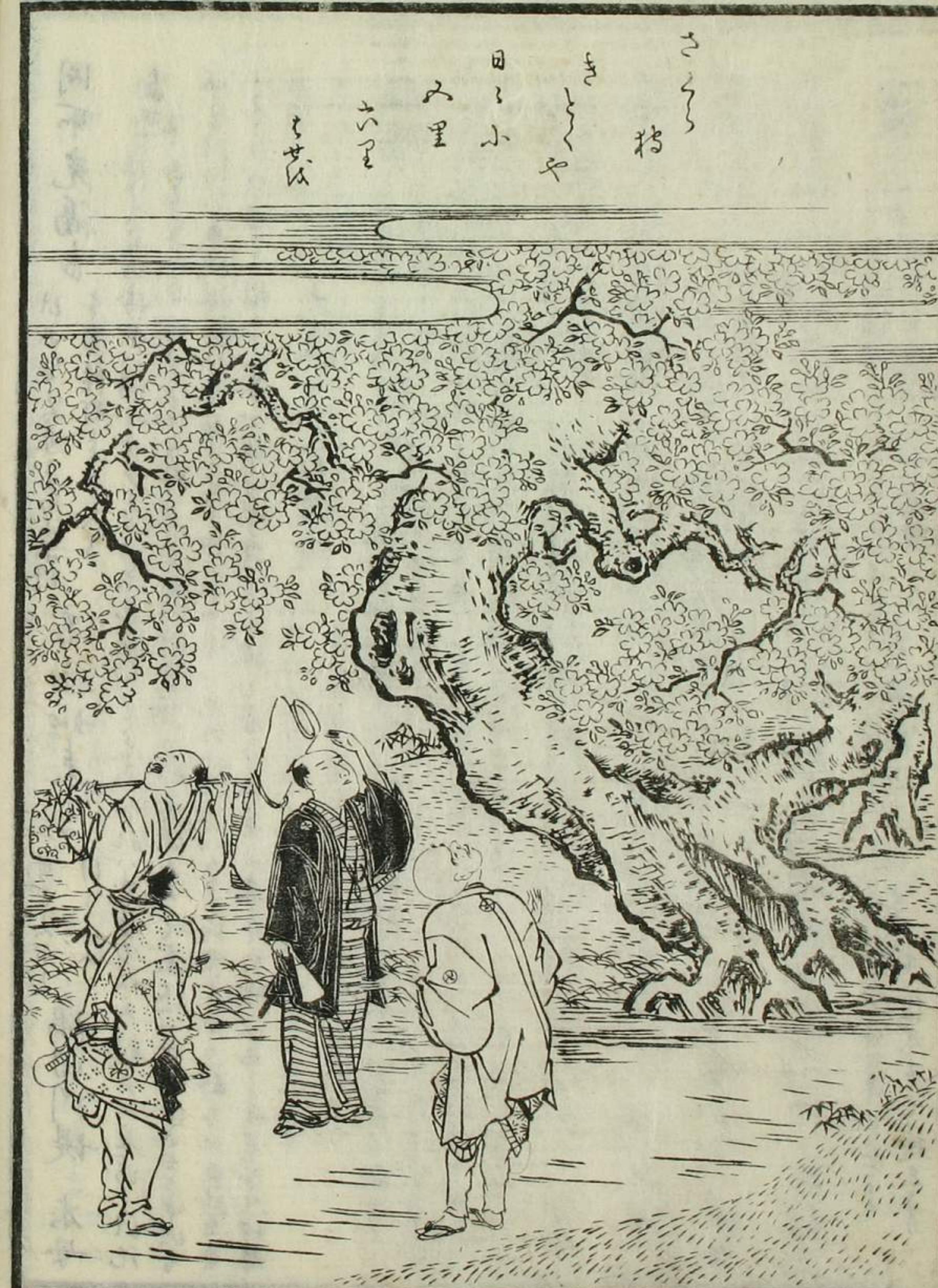
八幡みあ 深川油房より八十程前アツマノキリ ありを多椎木多く植えり 宮妻森邊 四本堤

稚木多く植えり

東都風土記 卷二十一

上

一



さく
日 小
み里
かき
六月
ちせん

連櫻○因一 東叡山

車坂の邊

花櫻の一枚擧オカツよりて因並を櫻も且あに祀せ。聞そもへき日並よりま櫻と見んとすべ
あきとりわくにて見るときあり櫻よ限らば開花の時淮大概定りあれども多のき暖ふとく
かーの連連あり又種類よくりても第底あるう處一も一山よりともとくさうりと等す。トノリ
る事所もほほくねにばれハ富よ大ていと譽く。或人云怪頗ハヤシう櫻ある哉。不六千有九
品今東武より百余石よりとす。

○花のほ多殊を曲の師道門下の童子幼女と集ハサウて花より出る又をゑ庵の花見よ壁日カヒとし閑田

川あとを多く「手弓の師と車掌やむの見風雪

櫻茶○立葉より半

トテ唐坊冲 平井

支地むし秋葉のあひ葉の美あり

○荒波小毛室 惺窓大集云古人云く我亦云如日本余のむを説度覽の美よ誇ホコロ

けも圓とり來ハ召と申とくハ召の美ハ士峯武也鴟田荒波の空氣と冠ハシメして之より來日漏

田川亦荒多山日暮里の美をも爲ハシメたの荒波やま大坂淡々

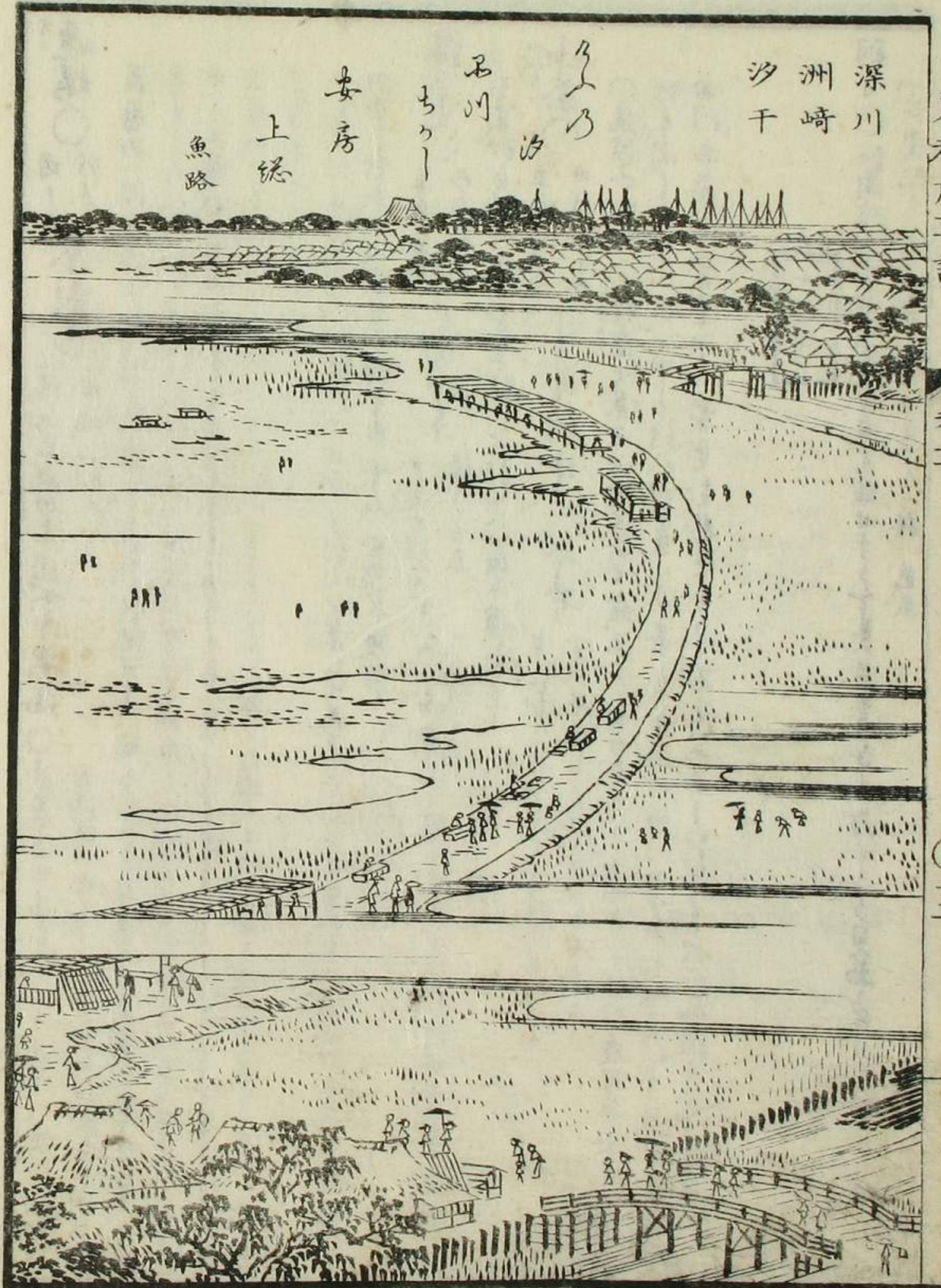
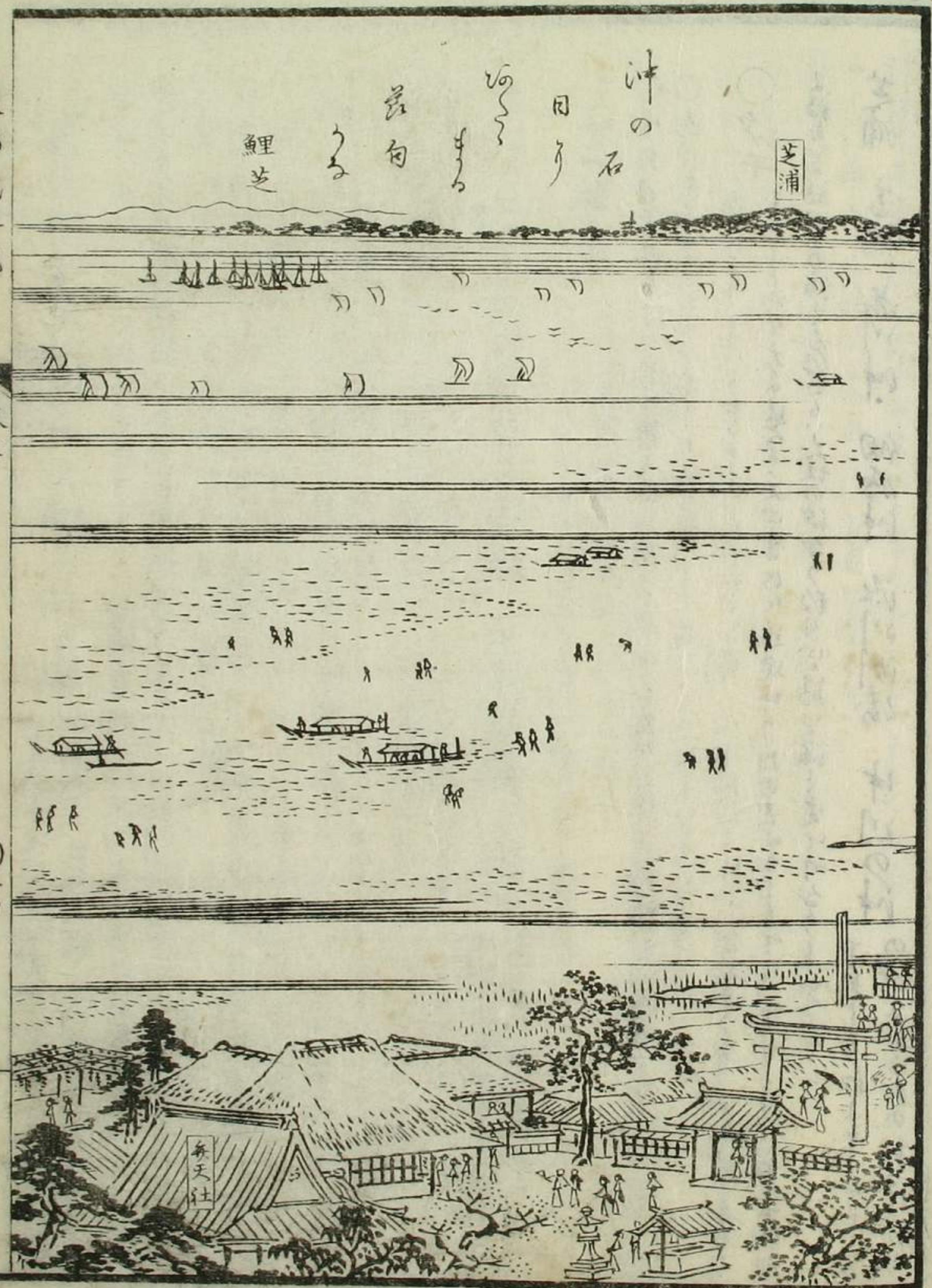
三月

朝日○阿蘭陀入京府の年今日を誠せうと東日定ひかへてすく見爲す

ア蘭陀もあよまよたりる。韓芭蕉

五
卷二十一

三月



○商同中吉原仲の町酒還く梅と桂
ナカ チヤウ
ウ
まひうてほと清ひ美物よりボンボリに爐焰
タツカ
と恵すりあむよ時て一入うちも一様と
梅の花延ニ己巳の春より始りトヨトヨ
梅浦也原ふじりの里ハ野鶴繁昌よりも

じり、万葉の物語集、も見る事多し。此の文もつづねる。おれ女の處吟よ。ま
とありあにだる、ふくらよも一二あり。萱洲散人の詩よ。

中を以て達坂
居つけ乃取足を失て梯外處も深く分
るよりま縁で蝶も橋も芭翁花火
の如きあれば後期のむ松葉や瀬川

一國年中和風の如きをもて
扇尾瀬川
一ちりあんでもひまくらや小雪 同じ扇
武かくの付子先づう揚ぐる 兵庫や月を
引てのやけすまほ乃夕さくら 東外

○女子離遊女子の離遊二月のまより風邪かぜとよほどして肺はいをありあがめのあとひて時食ときく

○今日同志社あるよ於て離人形と飾るやあり是由ハ祖父リ編輯の名不景會ふテ
○萬月武志まごの女子ヤドサガトリ又ハ寂入シキナトモ多よりア母ホシキ日定らレ

○ 汝干 過月より四月又多ひの間之月ニ貞と節とひも同聲トタレハ政耗甚もあらん御波の事もト
モ取よまうて大よ遠アリ又空虚ヒテ遼遠シテ周の太小あまリテモ一室トムトア或人云今世

は船と船の間のはとをなる、大河の港をも有すが、海と空て可なりと云ひ

のいに、西のめの東へ

特、年々割すを海底陸地とすまことにかくもて蛎蛤と拾ひ砂中
引残りて沙泥よ小魚として宴と作せり

元集承代候ハまんぞ東北の句よ
間指ハ元集承代候ハまんぞ東北の句よ
其角一怒すくむひくとすまん汝干うな
全

今向井の橋の外溝の院の圍とねせらるを辺の男女若稚日毎お詫び
摘要

て鳥むきの内、里方と聞もせり。○奉公人出候るも、今日僕婢シモヘヨモフチ回主と婢しておまよはひにまへん出でりのうふあ

行程四百六十里餘而
至宿

今日六十一日逝世後村高先君之父上人報恩達天威一於下より來活多一
八十世番之田地五院市施のゆゑ

○
一回追はる、十八ヶ所のまじめ大師巡拜 次てもうもよ一二の度ようちらほそ
酒九二十里の余りもいも義清のと先づぬとぞもよの如

番 二本板
正覺院 八十番
正覺院 三田處丁
八十五番 泉涌院
七十七番 弗累院
六十六番 本善院
五十五番 三田處丁
五十五番 本善院

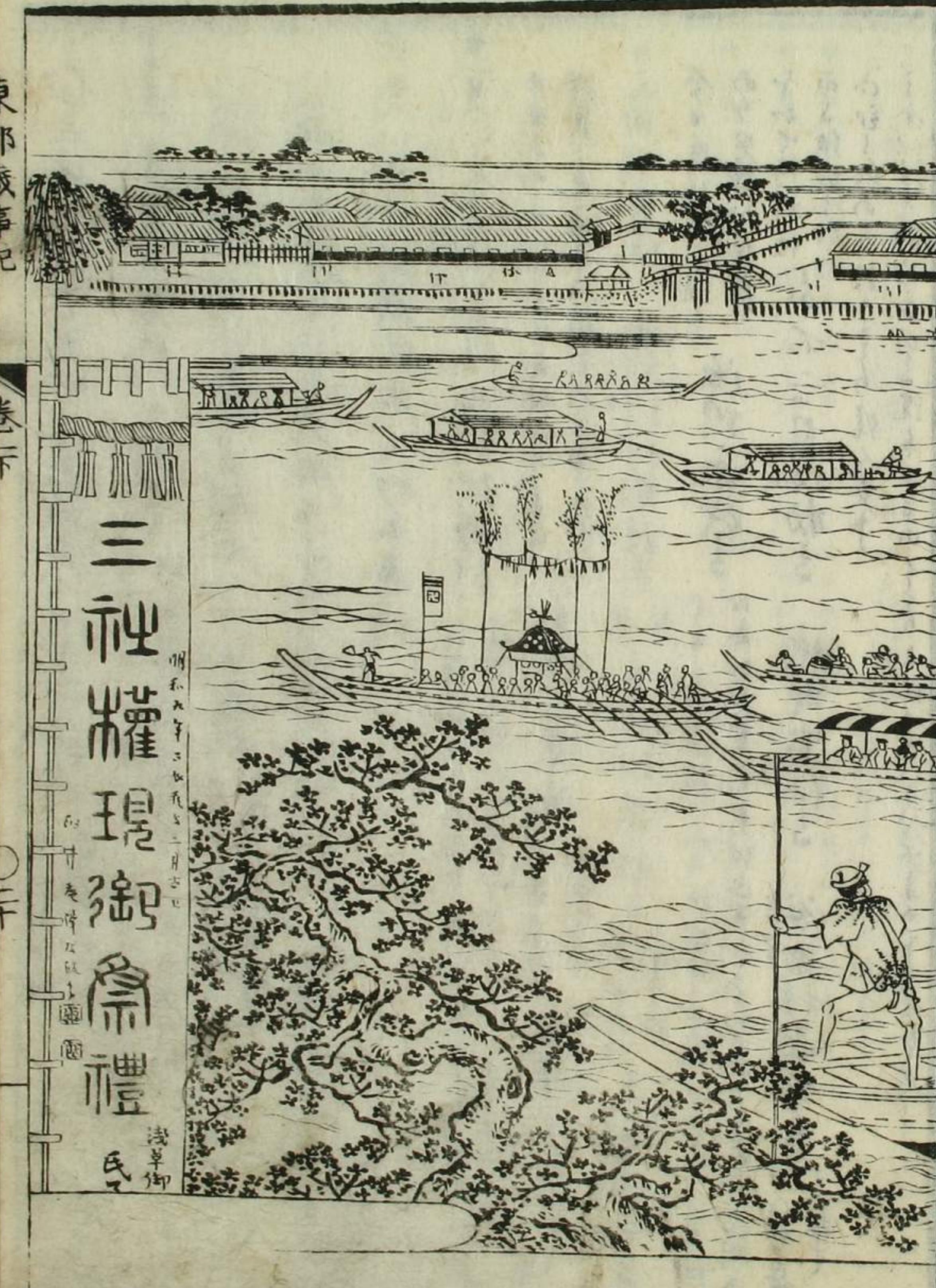




三社權現御而禮

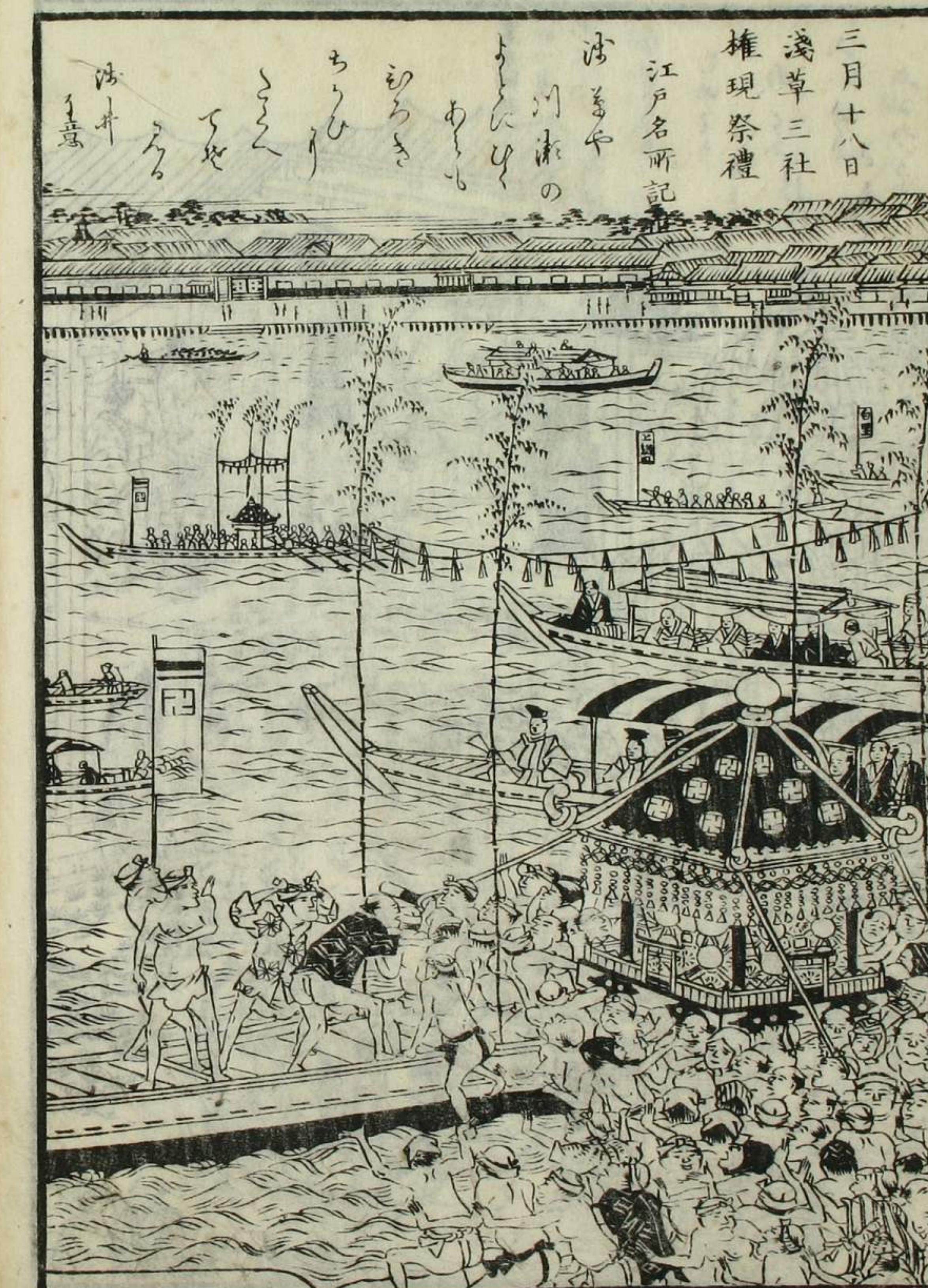
明和六年三月十八日

淺草御



三月十八日
淺草三社
權現祭禮

江戸名所記



○之法修多万神詠陀經廿八日未之修
信之彰懶
未二

十九日○はるか雷神のあ蓑市
隔年春耕を終る年八十八日又市立つ

○此と本つる法華經手部廿八日述修訂 あの写本帳をもと
李本の編索彙集を

○源川奉摺旨因光大師濟忌日有述○小石門上
又坡
雨岩馬同野其人有述

廿月○東户王滿之奉
作乐集序

○今明日本新羅漢高麗山卷法會

開山淡眼禪師の忌より
系活の垂事へ普集成出す
徳光院歿去沙か物修行

廿二日根津檜視社奉之神乐興行○喜山玉窓寺
大内○小内○上房○
十六日○蓮口上人御

志し海野一郎
さる廿七日より修訂

○ふ川多海ちけ少林院利休志リキサかの茶人セニク

去以是作兼行宮也。東都之北

も院の境内よりて開帳あり
日數

少々か一種の送り物櫻桃灯おまけあり
是又後との日送り迎ふるより移一丸あれば乃

語翁吉誠別號也清潔秀麗如來住持善光
律主也字跟叟有○法苑字の○院主もくらし

開帳か、同宗開帳の場所は河内に限らま
せう町と経て用ひゆうのち院へお参り

又元集 手の春秋式のものは少りゆふか
清威天あくまうけ本小もあけの再興しさう

卷之二

東者居言

卷二

卷之三

暑とあやまつゝ重れぬ風の事もかく蟻の如くみままでアゞレ御宿の事とては蟲ア尋
ねて「まちのはま。ん。う。まひ小乃下向也」其角

卷之三

景

暑とあやまに霍乱の事もかく蟻の如くみままで下より行程のことをとほ蟲不尋
所で「まちはまし水乃下向也」其角

○勅進相撲 夏冬ニありあともひ晴天十日うちの境内よ於て無事も
圓向院とす一の場所トには除茅沢町東師源川八まん丈芝愛宕社也あらうア筋のまづ
未のより幅狭一蕃昌毛穎小豆一から又名角力と名付て櫛古の名勝跡よ無事する
とゆき帰女子も見物せしむ江戸勅をお撲の駒、寛永元年子も明石志度ノ助といふ
者寄角力と号けに江戸市内にて晴天六日よ無事もまつて三十一年に経せば、
寛文元年壬午年夏官事よもて毎ひ無事一回りうまよりお續て今より無事一回り
す。古今お撲大全よる無事行次あより江戸中多才と商ひ又無事の日毎よ太鼓と音に
よる。今お撲大全よる夏ふしき都下に名うる諸生坐あ玉橋畔或、下岩浦葉木の湯橋よ
○書画會 余一門下の子弟どつとへ序上ふして毫と走らう扇一紙半幅ともふる
橋とよ充満す。泰平の筆すりて文華の如きと看るゝ一又立毛活花狂お諱諧
圓碁ね碁ふ乃集會も甚か女伶の漫会あり

○法衣衣冠會 洋溢程小唄う法を除毛虫の藝人、その上まんてモ師匠う
藝名とひて師範ともいひの名にめ合とそつ身同つて酒肴よ會し
藝と傳と來たり夏と家とす

○をるる御鬱古のためあるよ敵おく肩外の外はよ清一或、群集のよよひもむら程
のをとどきのり制限の達速と改て假練とあらむじよやものじよ列てもちく遊鉄の業
乃物とよき

桃○
うり大抵さういふ事
川河原
河原へ行及桃林ゆき
隅田川の堤
上野坊津

中野桃園　ハシモ若　名前小山よりト極ム所トテ方一里余紀白井より以東
谷中天王寺　ひそゑの山より今ノヤ。源川之宮源川多リ首桃木多ク生
とて芭蕉の句　源川、やまとよ御り桃のむ
梨花　立春より七十　ナマハギ　川筋の
生麦村　川筋の　ト緑八百の辺　市川の向がりあふるまで
生麦村　生麦村多リ　ト緑八百の辺　市川の向がりあふるまで
棣棠　同上　大森蒲田中野園　中乃　同上
棣棠　同上　大森蒲田中野園　中乃　同上

朱子門業師壇內
年半壁天賓裏山
連八重之
多外名不
予

高田山吹室へゆく人の名ふるひた田舎漁の故すあり世人多くとどくに略す
シキリニテ
立夏の日より社船をみ
良幸を見竟ぬ
墨の玉をもてり立
白
田舎

山中草木のいづるまで遡くよろしくおじれ御せん
是甚利害の花日暮
墨煙堂院少室も度半
久之原西人町
式部の室井殿へ大木
奈木志保

「何事アリサル
アタシハ一田ありまうつるナ
アホとアド霧濱の名アラクニテ
モナヒサ

壯觀之勿以爲未之度耳又面向西之處松木亦有東向之
乳頭上蒙被毛者石反左右大木而外其每多毛もの多所處之左右

魚巣スナドリ) 春巣キスヅリ 約のタバコ戸より往古幼い人から寛文のもうと縁のまの紙ひふ太力にま染ミタ

人是よつても寒熱を約り世とよ流布せりとより元約の時東温涼風氣陰晴乃清



古事

卷之三

水○もとよりの多めありちかまえくよめり來より夏へりけくるゝの風よやくよまく
よとせ秋をかくらけく未用ある處の日地氣立てもあくともり乍まへまほまほ
の源をかくらむありまふよひりて又すまくかくと又向の方よ源をうあくより
迹みの名ありと或云名のちゆじよりて八九月に病氣の時りうとまくお源まで善根沼のまくと
けんときうとまくお源まで善根沼のまくと
人か田島とありてまくと
夫木のまくとまくと
夫木のまくとまくと
夫木のまくとまくと

後賴朝臣

